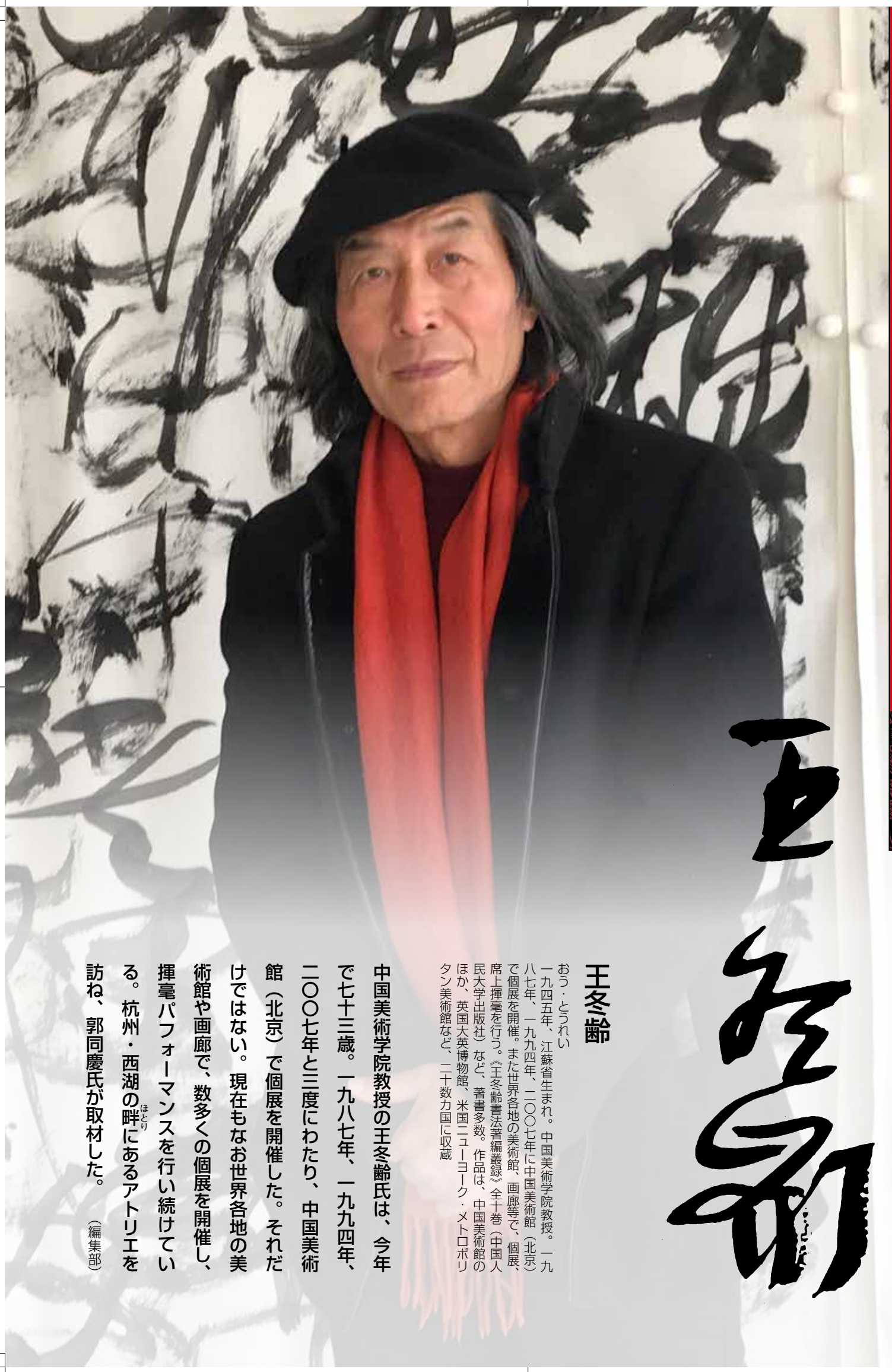
現代中国の書家二十人を紹介する不定期連載

# 中国当代書家二十人

第6回

監修／蘇士澍
取材・文／郭同慶



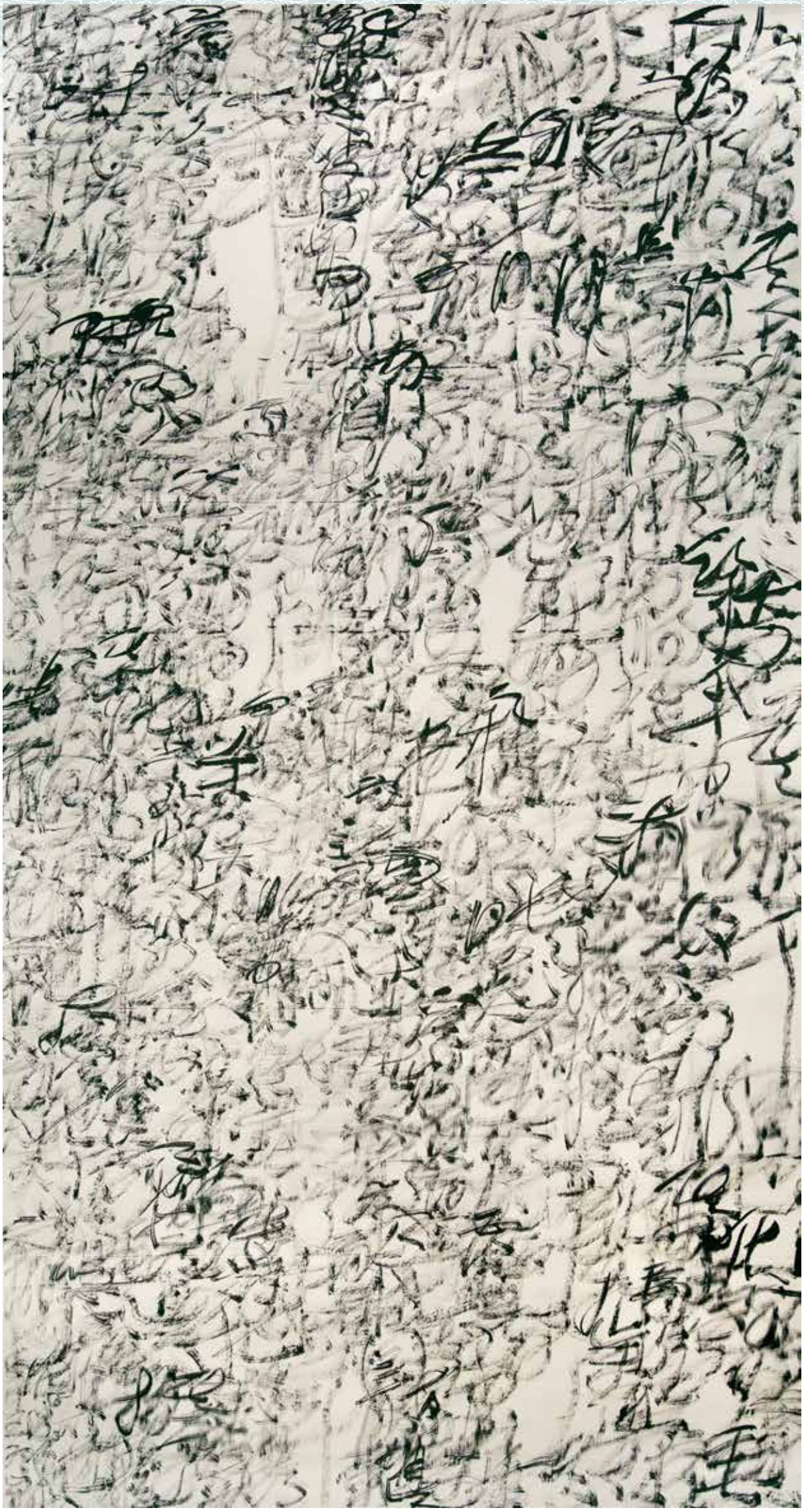
## 王冬齡

おう・とうれい
一九四五年、江蘇省生まれ。中国美術学院教授。一九八七年、一九九四年、二〇〇七年に中国美術館（北京）で個展を開催。また世界各地の美術館、画廊等で、個展、席上揮毫を行う。《王冬齡書法著編叢録》全十巻（中国人民大学出版社）など、著書多数。作品は、中国美術館のほか、英国大英博物館、米国ニューヨーク・メトロポリタン美術館など、二十数カ国に収蔵

中国美術学院教授の王冬齡氏は、今年で七十三歳。一九八七年、一九九四年、二〇〇七年と三度にわたり、中国美術館（北京）で個展を開催した。それだけではない。現在もなお世界各地の美術館や画廊で、数多くの個展を開催し、揮毫パフォーマンスを行い続けている。杭州・西湖の畔（ほとり）にあるアトリエを訪ね、郭同慶氏が取材した。（編集部）



中国当代6.indd 98 2018/10/19 15:25



《荘子・逍遥遊》

565×300
2016年



中国当代6.indd 99 2018/10/19 15:25

# 現代書法の世界王者 王冬齢

## 国際派の書法大家

北京にある中国最高の芸術殿堂である中国美術館で一度でも個展を開けば、すなわち中国では大成した実力者と見なされる。しかし今回の主人公である王冬齢氏は、何と一九八七年、一九九四年、そして二〇〇七年と三度も開催した。その上に各国の著名美術館や博物館で間もおかずに個展や即席揮毫のセレモニー、およびグループ展を開き続けた。東洋のアーティスト・王冬齢氏は、英国大英博物館、米国ニューヨーク・メトロポリタン美術館、スウェーデン・マルメ美術館、ベルギー王立美術館、カナダ・バンクーバー美術館などに足を運び、東洋の芸術・書道を広く披露した。中国国内外で行う催しは、毎回鑑賞者に視覚的な喜びと驚きを絶えず与え、特に王冬齢氏にしか出来ない超大作の展示や、巨大な作品を席上揮毫するパフォーマンスは、至るところで話題を呼んだ。その旺盛な創作意欲、そして前代未聞の表現力で、いま、中国では最も認知度の高い国民的なアーティストとなり、現代書道の王者として世界でも最も広く知られる中国人書家となった。

先頃、杭州・西湖の畔（ほとり）にある王冬齢氏のアトリエを一人で訪ね、中国で最も正統的かつ伝統的な書法を指導しながら、一方、自身は国内外で最も斬新な書道アートを次々と発表し、世界を驚かせている氏を取材した。創作用の広間には壁にも床にも書かれたままの巨作が広がり、真正面から目を襲う。墨の入った使用したままのバケツは無言で客を迎え、窓の外には西湖の柳の緑影がよく映える。王冬齢氏は自ら地元の銘茶・龍井（ロンジン）茶で持てなす。二人きりで二時間ほど言葉を交わし、終了後、写真の撮影にも協力いただき、その対応はまさに国際派の書法大家と感心した。

## 師・林散之との出会い

王冬齢氏は一九四五年十二月に江蘇省南通市如東県馬塘で生まれ、今年は七十三歳。如東といえば、遣唐使の一人で、比叡山の基礎を築いた天台僧・慈覚大師円仁（七九四―八六四）が海上で苦難を経験し、最終的に上陸した土地である。最近では円仁上人が上陸直後に滞在した「国清寺」の遺構が発見されたことで、日中間で話題になっている。

王冬齢氏は幼い頃は絵に興味があり、近所にある石の「牌楼」（神社の入り口にある鳥居のようなもの）をスケッチしたり、商店街の景色を描いたりした。十二歳の誕生祝いに親から《芥子園（かいしえん）画伝》を貰い、とても喜んだ。小学校の高学年の時には、呉昌碩の松や斉白石の海老などを模写し、そして徐悲鴻の馬も好んでいた。中学生や高校生になるとますます絵に熱中し、梅や竹、人物などを何でも描いた。王冬齢少年は父の影響を受けて書にも関心があった。父が近所の方々に囲まれて春聯（しゅんれん）を書く姿が好きだった。父より顔真卿・柳公権の書風の楷書の基礎を仕込まれた。真平の瓦製の大板に水で字の練習を重ね、懸腕法を訓練したりもした。

一九六一年、十六歳の一芸を以て志願した南京師範学院（四年制の師範大学）美術学部に入学することが

林散之氏（右）と王冬齢氏（左）。林散之は、青山杉雨とも親交があった



中国当代6.indd 100 2018/10/19 15:25

中国美術館の個展会場で、「共逍遥」（共に逍遥す）と大字揮毫（2007年）

3度目となる中国美術館での個展風景（2007年）。海外からも大勢のファンや研究者が駆けつけた。右は、38メートルの壁面を埋めた《老子》全篇

できた。同美術学部の教官は、大半が元（国民党時代）中央大学の美術学部出身のレベル高い教官だった。美術・書法教員を育成する同美術学部は、美術、書法、篆刻、そして美術史は必須科目であった。美術志望だった王冬齢青年は、書法担当の教官の学識に魅了され、知らず知らずに書法への関心を高め、優秀な成績と積極的な向上心でクラスの書法代表に推戴（すいたい）された。書法を担当した教授は沈子善（一八九九―一九六九）、助教授は尉天池（一九三六―）だった。沈先生は書法史に精通し、疎開の際に書学雑誌を発行して有名だった。クラスの生徒書法代表を務める王冬齢青年は、沈先生と触れ合う機会が他の生徒より多く、先生の執務室で特別講義として、漢の隷書名碑《礼器碑》《張遷碑》《石門頌》《西狭頌》、そして欧陽詢《九成宮醴泉銘》、王羲之《集字聖教序》、ならびに呉讓之の篆書などの臨書指導を受けた。大学二年の一九六二年、沈先生の指導のもと、呉讓之風の篆書で「第二回江蘇省書法展」に応募したところ、思いがけず入選することができた。大学三年の六四年には、大学設立十周年を記念する書画展に《嶧山碑》風の篆書作品が入選し、当時江蘇省画院院長の傅抱石氏の目にとまり、篆書の力強い「鉄線」が高く評価された。同行した学部部長・呂斯百教授（洋画担当）は「高質な線の描写力は絵にも大変役立つ」と加えた。

王冬齢青年は大学四年の一九六六年に文化大革命に遭遇し、正常な業務ができない大学側は全学生の卒業を一年間延ばした。一九六七年、やっと卒業できると喜んだ卒業生たちだったが、表情が暗い。師範を専攻し、先生になるはずだったが、文化大革命によって希望通りにはいかなくなった。王冬齢青年はまず省内印刷所に入り、後に泰興県文化館の仕事に抜擢されることになる。

書の道では、一九六七年の秋に王冬齢青年の才能を見込んだ尉天池先生が彼を連れて中国書壇の大御所である林散之（一八九八―一九八九）先生を訪ねた。その時、林先生は南京林業学院に勤める二男が住んでいた宿舎に身を寄せていた。狭い部屋に大幅の山水画を飾り、その下に林散之翁が座っている。王冬齢青年は持参した毛沢東の語録を各書体で書いた作品を広げた。林翁は一枚ごとに批評し、特に行草体で書いた対聯を絶賛した上で、今後、行草体に力を注げば、かなりの成果が期待できると激励した。その後、文通を中心に林翁との師弟関係が続いた。《書譜》《集字聖教序》などの臨書を送り、添削していただいた。

ちなみに林散之氏は日本でも知名度が高く、青山杉雨氏と親交があった。青山杉雨氏が訪中団を率いて一九八四年五月に南京の林翁を訪ねた際、「草聖遺法在此翁」（草聖の遺法は此の翁に在り）の七言一句を揮毫し、林翁の書芸を讃えたことは、中国書壇に残る逸話になった。中国で林散之氏を「当代草聖」と称するようになったのは、このことによると言われている。林散之氏は于右任以来の中国書壇における草書の最高峰であると、学界はもちろん、市場でも評価されている。

一九七〇年、七十二歳の林翁は、不注意によりひどい火傷（やけど）をした。退院後の数カ月、林翁は療養のため揚州市にある二女の住まいに滞在した。林翁の意向を踏まえた同市文化局より下部の泰興県文化館に連絡が入り、王冬齢青年が臨時的な「助手」に指名された。王冬齢青年は迷わず揚州に向かった。文化局の招待所に泊まり込み、毎日喜んで林翁の世話をした。日常生活の細やかなことから墨磨りまで、すべて王冬齢青年の日課だ。そして師が揮毫する際には、詩文原稿の用意、紙の準備、揮毫時の紙の移動、押印などのために助手として働いた。午後は人民病院への通院に同行した。草聖と触れ合った日々は、王冬齢にとってこれ以上に



中国当代6.indd 101　2018/10/19 15:25

沙孟海氏（左）と王冬齢氏（右）。王冬齢氏は中国美術学院で沙孟海に学び、沙孟海の指名により教官として大学に残った

ない貴重な経験となった。師の臨書や創作の現場に立ち合ったことはもちろん、師からは二つの課題を提示された。その一、各種の漢隷碑に力を注げ、その二、李邕に取り組め、と。

その揚州の時期に、西泠書画社主催「魯迅詩詞書画展」の責任者・費新我氏より、林先生に出品の依頼があった。林先生は、王冬齢青年に共に出品するようにと誘った。《礼器碑》の書風で魯迅の詩文を書いた試作に対して、師は筆を執って《張遷碑》と《礼器碑》をミックスし、より重厚な書風で同詩文を書いた。その手本を参考にして創作した作品を出品したところ、非常に好評で、王冬齢青年は揚州市文化局長に認められ、同局美術創作チームに抜擢され、書画の創作を専門とした職務に就くことになった。毎日の仕事は書法の研鑽、および創作である。情熱に燃える王冬齢青年は、再び古典碑帖に没頭した。取り組んだ主な行草書は、米芾《蜀素帖》《多景楼詩冊》、王羲之《十七帖》、孫過庭《書譜》。林散之翁は二回ほど文化局に来て、弟子の王冬齢青年らを激励した。

## 国内外で指導力をふるう名教授

文化大革命は、一九七六年に終了。大学教育は徐々に正常化し、中国美術学院は、史上初の書法専攻の大学院生課程を一九七七年に教育省に申請。一九七九年、正式に創設された。大学は全国でわずかに五名の生徒を募集し、江蘇省より応募した王冬齢氏は見事に合格した。

中国美術学院は、最高の教授陣を備えた。書法および書論は陸維釗（一八九九―一九八〇）教授、書法および金石学は沙孟海（一九〇〇―一九九二）教授、篆刻および理論は諸楽三（一九〇二―一九八四）、篆刻は劉江（一九二六―）教授、古代漢語（古文書）は章祖安（一九三七―）。王冬齢氏はクラスメイトの朱関田、邱振中、祝遂之、陳振鎌らとともに、最高の教授陣の指導のもとで特別な課題を咀嚼し、二年間、理論と実践の両面で相当にハードな内容により鍛えられた。一九八一年、五名の生徒が全員、卒業論文と創作作品を教授会に提出し、論文答弁も満場一致で通過した。王冬齢氏は陳振鎌氏とともに、沙孟海学長の指名を受けて教官として大学に残った。王冬齢氏は、沙孟海学長をはじめとする先輩教授たちのアドバイスを受けながら、新米講師として明るく教鞭をふるい、院内の庶務を積極的にこなし、すぐに即戦力となり、人気講師となった。

そして大学の教育現場で中堅となった王冬齢氏は、一九八七年、四十二歳の若さで、八十七歳の沙孟海学長、ならびに六十一歳の学部部長・劉江教授とともに、史上最大規模、最高のレベルの日中両国の書家同士の交流の集いに招待された。四月十二日、紹興郊外にある蘭亭で、人民日報社と読売新聞社が共同主催した日中初の「曲水の宴」に王冬齢氏の姿もあった。王冬齢氏は、啓功、沙孟海、謝稚柳、顧廷龍、沈鵬、劉江ら中国書壇の重鎮とともに、青山杉雨、村上三島、小林斗盦、梅舒適ら日本書壇の重鎮を熱烈に歓迎した。来場した一番若い日本人書家を尋ねたところ、王冬齢氏は、五十五歳の今井凌雪氏を紹介された。王冬齢氏と日本人書家との親交はこの「曲水の宴」から始まったのである。

一九八九年、王冬齢氏は、姉妹校の米国セントポールのミネソタ大学に交換教授として赴いた。一九九二年まで、同大学で芸術学部、および東洋学部の大学生に書法を教えた。王冬齢氏は米国でも人気が高かった。個展や講演会、そして揮毫会の誘いが絶えなかった。約四年間の米国滞在の間に、王冬齢氏は大学内外の芸術家や東洋美術愛好者と交流を図り、通算二〇校の大学で講演を行い、個展を開催した。

交換教授としての四年間の渡米経験は、王冬齢氏の芸術家としての生涯にとって得たものが非常に大きかったそうだ。異文化の深層と触れ合った王冬齢氏の内心の葛藤には、凄まじいものがあった。意味を表す東洋の芸術である書法は、どのようにしたら言葉の壁を超えて、西洋人にも伝わるアートになれるのか？ 従来通りの伝統的な方法、すなわち書体や書風をもって懸命に教えたが、限界を痛感したのである。その時に答えは直ぐに出なかったが、帰国時に課題として持ち帰った。

一九九三年、北京の文化省の要請で帰国し、本来は直接に大学に戻る予定だったが、中国書法家協会の研究部の職務を拝命した。その間、中国美術学院の肖峰（一九三二―）学長より、学院に戻るようにとの誘いが何度もあり、翌年の一九九四年には再び学院へ。王冬齢氏は現在まで書法学部の中心的な教官として教壇に立ち、数百名の大学生、大学院生、そして博士課程の若者を指導し、いまでは王冬齢教授の教え子たちが全国各地で活躍している。

一九九七年、王冬齢教授は、提携校の岐阜女子大学



中国当代6.indd 102 2018/10/19 15:25

中国美術館での最初の個展（1987年）にて、大字作品《泰山成砥砺　黄河為帶》（320×720）の前で

の交換教授として来日。日本人の女子学生たちに一年間、中国書法を教え込んだ。

王冬齡氏は、中国美術学院の名教授として教育の最前線で得たものを大事にし、教えた内容をまとめ、そして日々、実践と理論の両面の研鑽を続けた成果として、中国美術史、特に書道史・篆刻史に関する著書や評論集（美術・書法）が膨大にある（＊1）。歴史や理論の専門家でもなかなか到達しない境地であり、筆者も感銘に堪えない。

＊1　主な著書や論文集を発表の年代順に並べてみた。《美術自学叢書　書法芸術》（中国美術学院出版社、一九八六年）、《画人学書概述》（高等教育出版社、一九八九年）、《中国美術通史　書法篆刻史篇》（山東教育出版社、一九九六年）、《書法範本経典》（浙江人民美術出版社、一九九六年）、《中国書法名作大典》（広西美術出版社、一九九六年）、《中国芸術教育大系　書法篆刻篇》（中国美術学院出版社、一九九九年）、《中国大百科全書　美術篇》（中国大百科全書出版社、二〇〇三年）、《清朝隷書要論》（上海書画出版社、二〇〇三年）、《師範大学美術教育専業必修課目教材　書法》（山東美術出版社、二〇〇三年）、《中国現代書法論文選》（主編、中国美術学院出版社、二〇〇四年）、《名師指導　張遷碑篇》（北京図書館出版社、二〇〇六年）、《書非書　二〇一〇　杭州国際現代書法論壇文集》（主編・中国美術学院出版社、二〇一二年）、《王冬齡名作名家談》（中国人民大学出版社、二〇一一年）、《王冬齡現代書法談》（中国人民大学出版社、二〇一一年）、《王冬齡創作手記》（中国人民大学出版社、二〇一一年）、《中国現代書法論文選　二》（主編、中国美術学院出版社、二〇一二年）、《書非書　二〇一五　文献集》（主編、中国美術学院出版社、二〇一五年）、《書非書　二〇一五　論文集》（主編、中国美術学院出版社、二〇一五年）、《王冬齡書法著編叢録》全十巻（中国人民大学出版社、二〇一五年）である。

《儒道佛》

265×208　1987年



中国当代6.indd　103　2018/10/19　15:25

## 現代書道の王者

名教授としての指導力とともに、書家としての創作意欲、作品展示や発表、席上揮毫に関するエネルギー、そのどれにおいても、王冬齢氏に匹敵する書家は、目下の中国には見当たらない。国内外で開催した個展や席上揮毫のセレモニーの数も規模も、王冬齢氏が世界でナンバーワンである。

王冬齢氏が最初に中国美術館で個展を開いたのは、四十二歳の一九八七年。最高峰の日中蘭亭の宴に参加した直後に、七十数点の大作を北京で展示した。中国美術館における超大型の作品の搬入や展示には、大変

大字の草書で《般若心経》を揮毫した



中国当代6.indd 104 2018/10/19 15:25

大勢の観客が見守る中、大作を書き上げていく

中国美術学院における揮毫風景（二〇一一年）

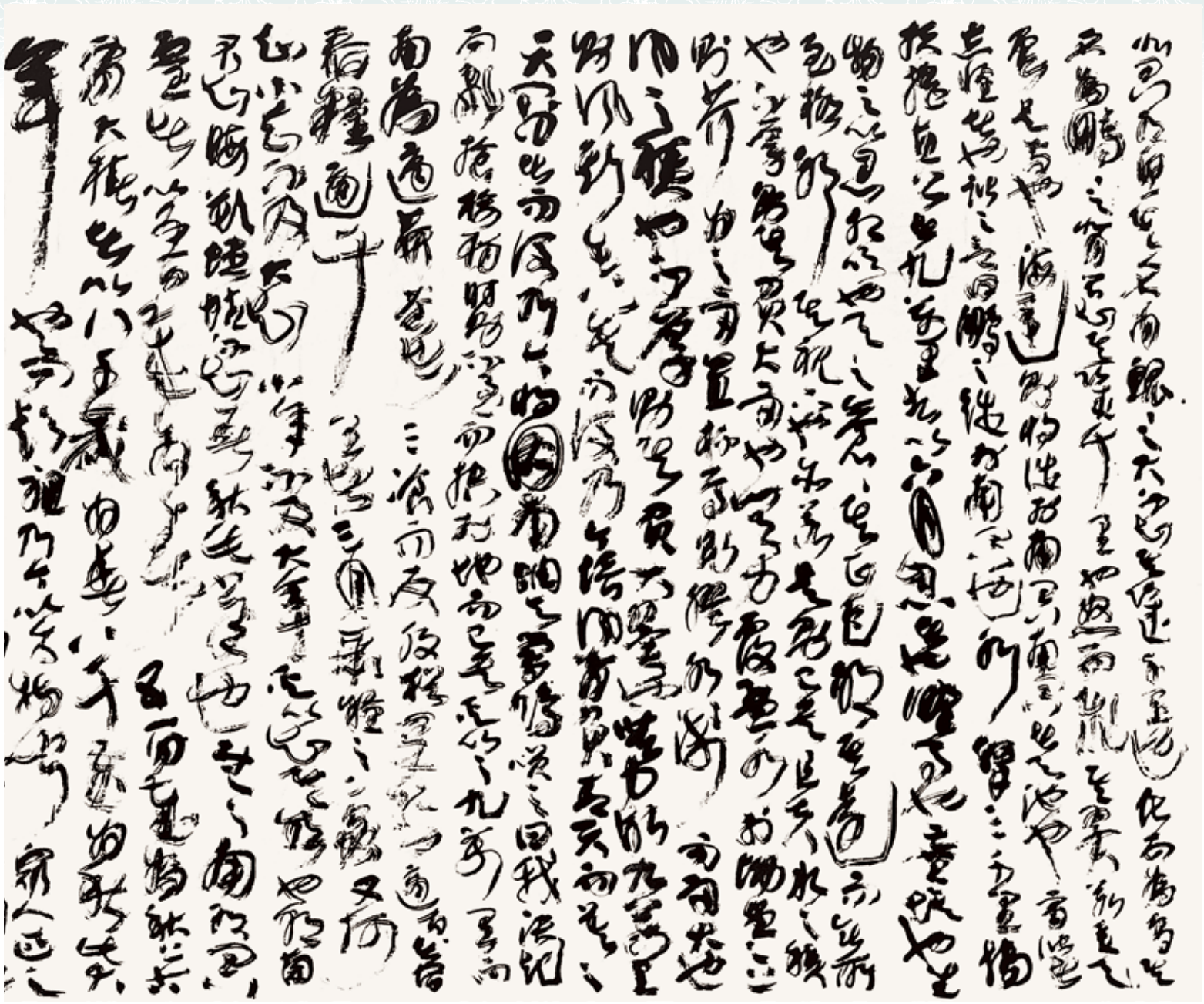
な苦労があった。開幕の当日には、書壇の大御所、中書協主席・啓功、副主席・沈鵬、そして勤務先である中国美術学院の学長・沙孟海や、陸巖少画伯の姿もあった。展示会場の入口には、師である沙孟海・林散之両翁の題字があった。隣には啓功主席や陸儼少画伯の題字もあった。

恩師・沙孟海が愛用する椽筆（てんひつ）を借用して初めて書上げた四屏（三・二×七・二メートル）の大字作品《泰山成砥礪、黄河為裳帯》は、伝統的な造詣の深い書風での話題になった。最後の「帯」は作品の縦幅を精一杯に使い、三メートルを超えるほどに大きかった。年配の人々は、六〇年代の初期に北京で開かれた「豊道春海展」を思い出した。春海翁の代表的な作品に匹敵するほどの迫力があった。もう一点の話題は、《儒道佛》という三屏作だ。中央の屏の、わずか〇・三六平方メートルのスペースに、「蠅頭小楷」（蠅の頭ほどの細字）で《老子》（五千言）を書き込み、来場者を感服させた。その細やかさは、文徴明の再来と絶賛された。

二〇〇三年、中国美術学院が創立七十五周年を記念する学術プロジェクトとして「アジア当代芸術展」を開催。学長・許江氏の指名により、構内半円形ホールの壁に直に制作する大作の依頼があったために、十一月四日の午前、王冬齡氏は移動式の梯子に登り、高さ一二・五メートル、幅七・五メートルの壁に草書で《荘子・逍遥遊》を揮毫し、半日で完成させた。その「壁書」は創立七十五周年の最大のお祝いとなり、鑑賞者の目を奪った。その後、大学の収蔵品となり、今もそのまま展示されている。ちなみに、《荘子・逍遥遊》は、同年、リクエストにより二度目の大作《荘子・逍遥遊》（七・五×一〇メートル）を、そして二〇一一年には三度目の大作《荘子・逍遥遊》（七・三×一七・八メートル）を一般公開で制作した。



中国当代6.indd 105　2018/10/19 15:25



750×1250　2003年

二〇〇六年の冬、画家である中国美術学院院長・許江氏が北京中国美術館で個展を開いた。王冬齢は来場した際に、老友の范迪安館長と久々に再会し、握手しながら「中国美術館で三度目の個展を」と誘われ、翌年の二〇〇七年に行うことを合意した。

杭州に戻った王冬齢氏は、早速、構想に取り組んだ。中国美術館のメインホールの長い壁を《老子》全篇で埋める案に皆が賛同してくれた。もともと好きだった《老子》（五千言）を改めて数週間をかけて熟読し、そうするうちに前半の数章を暗記した。揮毫する時に原稿を読まなくても書き下ろせるまで心の準備を整え、いわば「胸中に成竹あり」の状態で備えた。そして材料の準備だ。表具師と相談しながら、周強、王佳寧、楊春らの弟子たちが二十六枚の紅星牌（四・九四×一・四五メートル）をつなぎあわせて、長さ三八メートルにもなる紙を用意し、墨は墨磨り機を活かしながら手作業も交えて用意した。揮毫は三日間をかけた。暗記した文言がリズムよく湧き出て、豊かな表情の大きな草書の文字が二十三枚に収められ、残りの三枚は細字を書き入れた。文字の大小の対比もあり、五千字を予定通りにぴたりと収めて仕上がった。

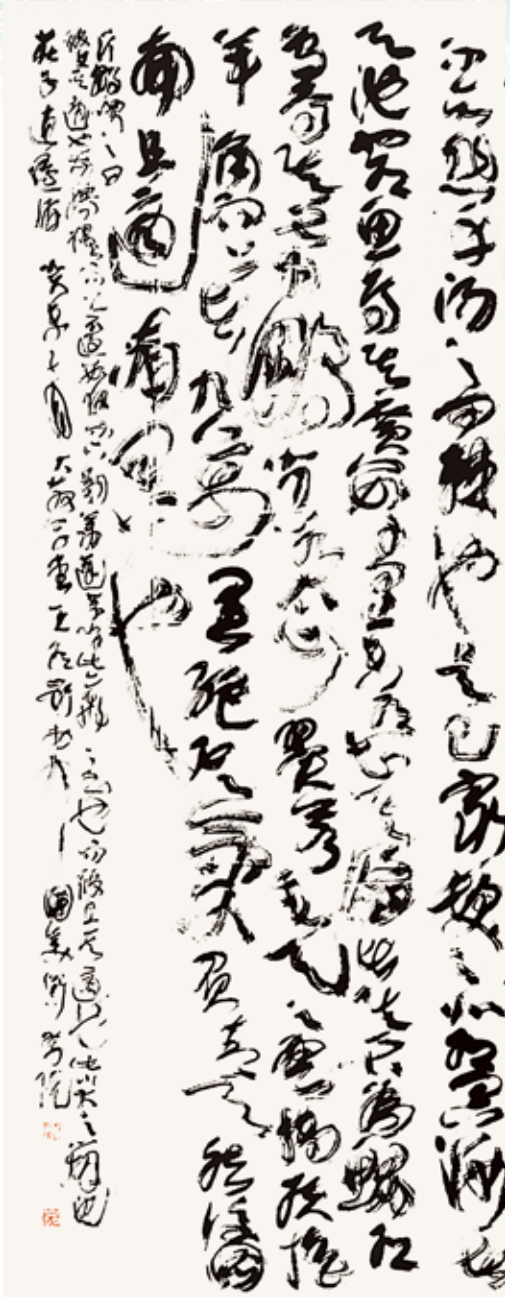
三八メートルの《老子》（五千言）とともに、五〇メートルの《易経》（二万言）の巻物が二〇〇七年の三度目の中国美術館での個展の目玉となり、メインホールの長い壁を埋めた。作品は四つジャンルに分けられる。「抽象水墨書」、「銀塩書法」（写真プリント用紙を使用したもの）、「人体書」、「伝統書法」。その手法、内容、そしてその巨大なスケールと超時代的な表現力で、中国書壇に王冬齢旋風を巻き起こした。浙江美術館の斯舜威館長は「王者の気概が溢れた個展だ」と評価し、中国美術館の范迪安館長は「王冬齢が獲得した精神的な逍遥の世界は、われわれの憧れである」と感嘆した。

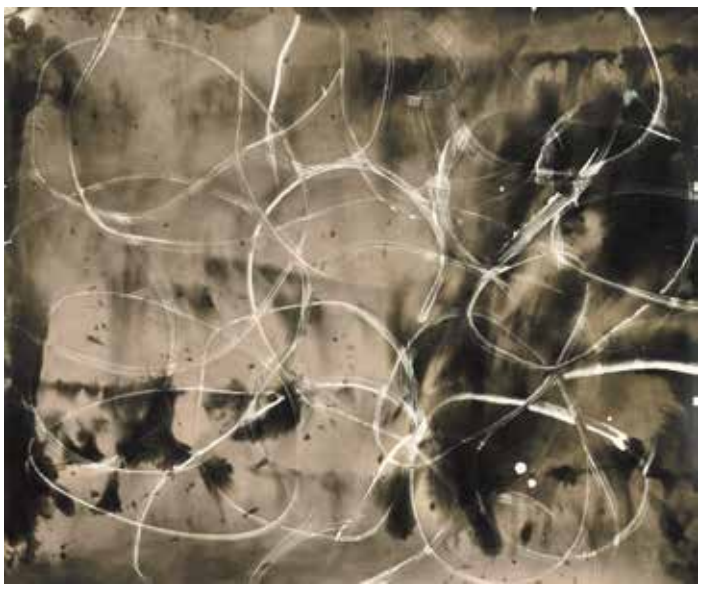


中国当代6.indd　106　2018/10/19　15:25

《老子》

280×170　2015年





《太一》

51×61　銀塩書法　2014年

《無為》

51×61　銀塩書法　2013年



中国当代6.indd　107　　2018/10/19　15:25

ニューヨークのADAA画廊にて、「乱書」のスタイルによる作品を公開創作（2018年）

《滾滾長江東逝水》（楊慎・臨江仙）

220×120　2017年

王冬齢氏は、現代書法の王者として走り続けている。王冬齢氏の挑戦し続ける姿の背後には、東洋の書法の魅力を世界中の人々に伝えたい、世界の現代アートの分野の中で書法を認知させたい、という希望がある。二〇一三年、王冬齢氏は「乱書」という新概念を発表し、従来の書法が厳しく堅く守ってきた約束事を覆した。「乱書」とは漢字の可読性を優先せず、従来の行間や字間を無視するという、これまでの固定観念を完全に打破するもので、自由奔放な線としての芸術性を極度にまで追求する。

二〇一八年二月、米国ニューヨークのＡＤＡＡ画廊で行った個展の揮毫会で、王冬齢氏は最新書風「乱書」を披露した。「乱書」の作品は、西洋の人々にも何かが伝わるようだ。

王冬齢氏の挑戦は、どこまで行くのか。今後、さらなるどのような書風が生まれるのか、とても楽しみである。王者は孤独、王者は嫉妬される。しかし、王者の実績（＊2）を誰が超えることができようか。

王冬齢氏は幸運な男であり、風雲児である。中国で最初に最高の書法専門訓練（大学院）を受け、また最高の師・林散之、沙孟海などに出会い、大学や学生たちに支えられ、今日の名教授と現代書道王者の座についた。取材の締め括りに王冬齢は「師門を辱（はずかし）めず、時代に愧（は）じない」と自用警句を披露してくれた。

＊2　主な個展は以下の通りになる。一九八七年、中国美術学院（杭州）、中国美術館（北京）。一九八九年、米国イリノイ州立大学、米国セントポール・マカレスター画廊、米国カンザス州立大学、米国セントポールのミネソタ大学、米国カリフォルニア州サンクリルーズ芸大。一九九〇年、米国セントポールのミネソタ大学、米国サンノゼ・DP画廊、カナダ・モントリオール大学。一九九一年、米国カリフォルニア州立大学、米国ノースダコタ州立美術館。一九九四年、中国美術館（北京）。一九九七年、名古屋市民ギャラリー。一九九八年、米国サンノゼ・DP画廊、ドイツ・キールアートスクール。一九九九年、深圳市美術館。二〇〇一年、米国ニューヨーク・Eギャラリー、杭州金彩画廊、紹興市蘭亭国際書法フェスティバル。二〇〇二年、米国ニューヨーク・



中国当代6.indd　108　2018/10/19　15:25

大英博物館にて、「乱書」による《般若心経》を揮毫（2016年）

グッドハウス画廊（Goedhuis Gallery）。二〇〇三年、南京芸蘭斎美術館、香港中文大学。二〇〇七年、中国美術館（北京）。二〇一一年、杭州浙江省美術館。二〇一二年、杭州三尚当代芸術館。二〇一三年、江蘇省南通博物苑、北京墨斎画廊、香港漢雅軒画廊。二〇一四年、天津今晩人文芸術院、杭州精彩画廊、香港文化センター。二〇一五年、温州当代芸術館、米国ニューヨーク・ブルックリンミュージアム、杭州三尚当代芸術館。二〇一六年、北京故宮太廟芸術館、北京墨斎画廊、ニュージーランド・オークランド美術館。二〇一七年、香港漢雅軒画廊、深圳市OCAT深圳館。二〇一八年、米国ニューヨーク・ブルックリンミュージアム、シンガポール・誰先覚画廊などである。

そして、公開揮毫会は以下の通りになる。一九九八年、スウェーデン・マルメ美術館で巨大な草書の「龍」。二〇〇一年、ドイツ中部ヴィースバーデン市で二晩連続の大字揮毫。二〇〇二年、英国大英博物館で「独與天地精神相往来」を巨幅に収め、二〇〇三年、中国美術学院で二度ほど《荘子・逍遥遊》揮毫。二〇〇六年、中国美術学院で《老子》全篇、紹興市蘭亭国際書法フェスティバルで巨大な壁に《臨河序（蘭亭序）》全文を揮毫。二〇一一年、スペイン・グラナダ美術館でガルシア・ロルカの長編自由詩文の漢文訳で《夢遊人の謡》を揮毫、同年、中国美術学院体育館で巨大な草書《般若心経》、そして《荘子・逍遥遊》を公開制作（三度目）。二〇一二年、中国美術学院南山キャンパス体育館で《老子》全篇、深圳市OCT当代芸術センターで巨大な壁に草書《般若心経》。二〇一三年、香港都市大学で《周易》「天行健、君子尉以自強不息」を、香港芸術館で唐代張若虚七言古詩《春江花月夜》（長篇）を制作。二〇一四年、米国メトロポリタン美術館で老子の句「道法自然」を揮毫。同年、スウェーデン北欧美術館で巨幅に《周易・系辞》の句「窮神知化」を揮毫。二〇一五年、ドイツのハンブルク大学で草書の《荘子・逍遥遊》を壁面に揮毫、また同年、米国ニューヨーク・ブルックリンミュージアムで《般若心経》を「乱書」で揮毫。二〇一六年は最も豊作の年で、春に北京故宮の太廟で巨大な「乱書」作《般若心経》を公開製作し、暮れに再び北京故宮の太廟で「乱書」作《敦煌曲子詞》を書き上げた。そして、英国大英博物館に赴き、「乱書」作《般若心経》を揮毫し、また、同じように「乱書」作《般若心経》をカナダのバンクーバー美術館やオタワ国会図書館、ニュージーランドのオークランド国立美術館などで揮毫した。二〇一七年、深圳市OCAT深圳館の「竹径」書法展で、高さ四メートルほどの二〇一本の毛竹に「乱書」を実演した。二〇一八年二月二十八日、米国ニューヨークADAA画廊にて「乱書」を中心に発表、四枚の硝子板に白墨で「乱書」作を公開創作。

主な受賞歴は、中国文聯・中国書協による「第二回中国蘭亭奨・教育一等賞」、「第四回中国蘭亭奨・芸術奨」、「第六回ACC芸術中国・年度最も影響力ある芸術家・書法部門奨」、「輝いた人物十人」（二〇〇五年度、二〇一一年度）、「風雲人物・書法大賞」（二〇一五年）、『国家美術』誌における「焦点人物金賞」（二〇一五年度、二〇一六年度、二〇一七年度の連続三カ年）などを受賞。

作品は、英国大英博物館、米国ニューヨーク・メトロポリタン美術館、スウェーデン・マルメ美術館、ベルギー王立美術館、カナダ・バンクーバー美術館など、二十数カ国、および中国美術館に収蔵。

杭州・西湖の畔にある王冬齢氏のアトリエ風景

**郭同慶** かく・どうけい

書家、日本名山田慶太郎。一九五七年、上海生まれ。一九八七年に来日。王蘧常、銭君匋、蕭海春に師事。二〇一四年度に上海（朶雲軒）、東京、京都、前橋で個展を開催。上海書画出版社で作品集《墨海一粟》を出版。翰墨書道会長、東京藝術院長、東京海派書画院常務副院長、全日本華人書法家協会副主席兼秘書長、日本王蘧常先生顕彰会会長、豊道春海顕彰会顧問、日中友好協会参与、群馬県日中友好協会理事、上海中国書法院名誉院士、上海呉昌碩藝術研究協会理事、上海復旦大学王蘧常研究会常務理事などを兼ねる



中国当代6.indd 109　2018/10/19 15:25